

地域をつむぐ「縁結び人」養成塾 実践研修報告フォーラム 記録

平成 25 年 2 月 24 日（日）13:00～17:00

国際デザインセンター 6 階セミナー 3

1. あいさつ

（愛知県県民生活部社会活動推進課 主幹 中野充康）

2. 事業趣旨・概要説明、普及ツールの紹介

（特定非営利活動法人地域福祉サポートちた 代表理事 岡本一美）

3. 先進事例

『雲南市の地域自主組織と地域円卓会議』

（島根県雲南市政策企画部地域振興課地域振興グループ

主幹 板持周治氏、副主幹 石田誠氏）

●雲南市のまちづくりの指針

雲南市では円卓会議の有効性を感じ、昨年導入することになった。阿久比町のモデル協議の場を視察に行かせていただいて参考にした。

雲南市は知多地域 5 市 5 町より面積は大きく、人口は武豊町の人口とほぼ同じ程度。出雲神話のお膝元でもある。全国最多の銅鐸が出土し、たたら製鉄の遺構なども残っている。雲南市自体のブランド化を進めている。一方で、人口の減少は止まらない。高齢化率は 33% 程度。ある地域では 50% に達する。高齢化率は、全国平均の 20 年先を行っている、高齢化の先進地。

私たちは協働のまちづくりを進めている。平成 20 年にまちづくり基本条例を定めた。これは議会でも議決をした。とても意義のあることだったと考えている。そこで、「市民が主体的に関わる＝住民自治」を提唱した。

島根県のシンクタンクが算出した地域人口とネットワークとの関係性のまとめによると、人口が一人減るだけでネットワークは 4 割減る。よって、人口縮小社会では、ネットワークの減少を補完する仕組みが必要であることが分かった。

●地域自主組織の設置と役割

地域自主組織は合併による新市発足に当たり住民の発意によって発足し、地域課題を地縁組織自ら解決していくことを目指している。現在は 42 組織、29 の交流センターができています。過疎地域から市街地的な場所もある。200 名ほどの拠点もある。公民館を交流センターへと変化させてきた。平成 22 年からは地域自主組織が運営している。

自主組織のポイントとしては、連携して相乗効果を発揮して行くこと。できるだけ子どもから高齢者まで性別に関わらず参加すること。イベント型ではなく、課題解決型で進めること。また、地域力を活かすこと、自らの地域は自ら納めること、地域の総合力で課題解決をすること。

●事例紹介

ここで事例紹介をしたい。鍋山地区では「安心生活見守り事業」を行っている。「まめなか君の水道検針」では水道検針をコミュニティが業務委託を受け実施している。まめなかは元気かねという方言。声かけと検針受託により、安心安全の地域づくりと安定雇用が生まれ、住みよい地域となる。また、「守る君のまかせて支援事業の開発」を行い、24 時間体制で要援護者の見守りと SOS を受信する事業を実施している。

二つ目の事例は、中野地区の例。JA の空き店舗を活用し、毎週木曜日に笑いがわ市を開催している。特に、憩いのコーナーでは手作りの茶口やコーヒーが 100 円で飲み食いき、楽しい語らいの場となっている。こちらも、コミュニティが自立運営をしている。

●交流センターの検証と改善

公民館から交流センターへと移行し、3 年が経過する。交流センターの設置は基礎的な基盤整備だったため、さらに強化をしていきたいとし、24 年は見直し作業を行って来た。そこで、来年度からは交流センター職員と地域自主組織の一体化を目指し、地域自主組織による直接雇用を行う予定をしている。他に、指定管理に伴う人件費を確保し事務負担を軽減したり、地域福祉の見直しなどを行っていくことになっている。

繰り返しになるが、持続可能な地域社会の仕組みづくりのためのポイントとしては、地縁型の住民による住民のための組織であること。地域内の多様な主

体が参画していること。組織体制が確立されていること。活動拠点があること。活動分野が3つ以上あること。（これは複合的な活動であることを意味し、雲南市では「安心・安全」「歴史・文化」「持続可能性の確保」を設定している。）さらに、課題解決志向であることだと考えている。

●地域委員会から円卓会議方式へ

平成17年度から地域委員会を条例で設置し、町民の意見の集約と行政施策への反映を目指してやってきた。この仕組みの見直しをし、地域委員会は24年度に発展的解消をすることになり、今後は地域と直接的・横断的・分野別に協議をする円卓会議方式を採用することとなった。

基本的なルールとしては、それぞれが対等な立場で参加することや、直接対話方式により協議すること、また主役はテーマであること、総合型の円卓会議の他にも分野別の円卓会議を設けること、あくまで地域課題の解決を目指す場であることなどを設定している。24年度は試行として実施し、その反応もよかったことから、今後は分野別会議を基本に、内容に応じて規模別・地域別等を使い分けて実施していくこと、また、24年度中から可能なものは円卓会議を始めしていくこととなった。現在では婚活にも活用し、結婚対策円卓会議を実施したりもしている。

●これから・・・新しい公共の創出

合併直後から多様な仕組みづくりを行って来た結果、「やってくれない」から「やらしてくれない」と変化した地域が増えた。これからは、市民と行政がパートナーとなり、まちづくりの基本理念である「生命と神話が息づく 新しい日本のふるさとづくり」を目指していきたい。その上で、住民サービスの向上とコスト低減を行い、受益者（市民）の利益に適う地域づくりができると考えている。

4. パネルディスカッション

(パネリスト)

モデル協議の場

- ①阿久比町総務部政策協働課 主事 廣口洋輔氏
- ②知多市南粕谷コミュニティ 会長 石井久子氏

養成塾塾生

- ①えた〜なる・すまいるユニバーサルデザインコンシェルジュ 伊藤千津氏
- ②知多市新知コミュニティ理事・知多市防災リーダー 加勢田茂氏
- ③特定非営利活動法人まち・ネット・みんなの広場 迫分僚子氏
- ④特定非営利活動法人三河社中 理事長 石川れい子氏

■モデル協議①阿久比町の報告（廣口氏）

ガイドブックの8ページ目から阿久比町の事例が記述されている。私は今年から新設された政策協働課に属している。私の後ろ盾は、総合計画と住民税1%支援制度しかなかった。支援センターや登録制度もなかったのも、まちづくりの関係者すら分からなかった。人口27,000人。お互いいいことをしていても他の活動を知らなかった。まずは活動者や団体のネットワークを作りたい。その思いで協議の場をはじめた。行政の上層部レベルには説明不足と分かりにくさから何のためにやるのかと反発された。当時は「協議の場」と説明し、これで合意形成をすると伝えた。誰の権限で合意形成はできるのか。従来型の審議会との違いは？と理解してもらうことが大変難しかった。

ネットワークの形成に重きを置いたため、テーマは「みんなでつくるあぐいの夢事業」とつけた。参加者に依頼するとき、相手には非常に伝わりにくかった反省もある。テーマはできるだけ具体性を持っている方がよかったが、阿久比町では難しかった。

また、10年後という時間の設定は、参加者を従来の会長職ではなく実務担当者に参加してもらうことを意識したため。ガイドブックの9ページに参加者一覧がある。市町村域で円卓会議を実施するとき、参加者の設定が一番難しいと思う。なぜ、この人に声をかけたのかという説明が必要となるため。話を進める中で、自分も参加したいという方はオブザーバー参加という形で話に参加してもらうのはいいだろう。なるべく、想いが共有できる人を選んだ。私のしたいことを私たちのしたいことに昇華させたいと思っていた。ファシリテーターを誰が担うのかというのは、行政の方が担当するのは難しいところもあるだろう。しかし、今回は参加者全体での要望合戦にならない、市民と行政が&（あんど）の関係性になれたと実感している。

成果の活用では、対話と共有して集約するまではできた。これからは合意形成から施策レベルの決定の段階となっていく。今後も円卓の縁をつなげていく

ことが大事だと思う。この縁を生かして、次を展開したいと思う。

■モデル協議の場②知多市南粕谷コミュニティ（石井氏）

13ページから始まる。円卓会議のテーマは「楽しくあそぼう！南粕谷ハウス」とした。これは地域住民が一つの家族になれるように。住み慣れた地域でみんなが心豊かに暮らして行けたらと願い設定した。南粕谷コミュニティは昭和47年以降、大規模な企業団地ができ上がった。昭和58年にコミュニティが誕生。しかし、ここ数年少子高齢化により、不安の声が挙るようになった。平成22年から高齢者支援への取組を行うようになり、支え合いの取り組みの必要性が明確になってきた。

私は昨年、多世代で支え合う常設型多世代交流拠点の勉強会に参加し、それを地域でもできないかと考えるようになった。知多市民活動センターの支援の元資金調達を行い、議論を重ねる上で場所の決定まではこぎ着けたものの、経営が大きな課題となったことから、地域円卓会議を開くことになった。継続して運営できるような活動内容と、管理費の生み出し方を考えることとした。参加者には、多世代を意識し、30代の若者などもメンバーに選んだ。5回の会議では、実行委員会の情報も共有しながら進め、第4回は改修工事途中の南粕谷ハウスで行い、具体的なアイデアを出し合った。5回の会議を経てまとめたものを実行委員会に提案した。

結果、平成26年度からは会費での運営を目指し、まずは寄付金で運営をしていくことが決まった。また、運営について無理のないところで、平日の10時～15時までサロンを開催、そのほか月に1回のイベントの開催をしていくこととなった。求められたニーズに応えながら事業を進めて行きたいと考えている。

やれることからやろう、少しずつ改善していこう。というスタートとなった。12月で会議は終わったが、その縁が繋がっている。例えば、南粕谷の名物金柑ジャムの売上減少について相談され、南粕谷ハウスで販売したり、地元のパン屋で試作品を作ってもらったりという連携もできている。

また、保育園の園長先生が障害を持つ子どものお母さんとのご縁をつないでくれた。育児に疲れているお母さんをサポートできるような、新しい展開ができるのではと考えている。今後たくさんの方のつながりを作っていきたい。

■板持氏

阿久比町のケースでは、議会での理解について、基本的な部分を条例で押さえるのがいいと思う。協働の位置づけをしっかりとしていくことが必要なのでは。円卓会議の伝え方については、自分自身が体験することが重要。私たちは昨年からは試行的に開催をしている。効果を実感してくれているのが一番。参加者の声かけは、一旦は公募をして、その上で出てほしい人には声かけをするのが必要だろう。また、職場内でも円卓会議は使えると感じている。

また、南粕谷コミュニティの交流拠点については、知多市の市民活動センターで Ada-coda が交流の場として機能している様子を伺った。そういう場所には食事ができたりお茶が飲めたりという、食を扱うことが大事だと考えている。

■石田氏

多様な関わりが一番のポイント。多様な人が関わって少しずつできることから始めて行くことが大切。

■岡本

雲南市では住民が熱意を持って、様々な地域活動をしている。これは円卓会議をした結果なのか。

■石田氏

円卓会議に限ったことではないが、円卓でより、地域課題が明確になり、話し合いを続けながら活動してきているのだと思う。

■伊藤千津氏

誰にとっても生きやすいユニバーサルな社会を目指し活動を進めている。体感型多様性理解プログラム「トランス・クエスト」を実施している。このプログラムをどう伝えて行くかを考えていた中で、これをテーマにした協議の場を設定した。

意見交換会を開催し、平成 24 年 11 月に大学の先生や昭和区社協の方に手伝ってもらい、16 名の参加者を集め、協議の場を開催できた。プログラムのデモンストレーションを行い、終了後はお茶会をしつつ、率直なご意見をもらった。楽しかったという声も出た。新たな可能性の扉を開いてくれるのが協議の場だ

と感じた。中間報告的に第2回の協議の場を開催したいと考えている。

■加勢田守氏

知多市新知コミュニティの防災リーダーをしている。私は円卓会議をやろうとしているところ。平成17年に町内会の副会長をし、その後会長を2年間担当した。19年に防災リーダーの教育を受けた。防災理事となって、平成22年に防災グループを作った。町内会の役職経験者とサポーターグループを結成した。今まで参加していなかった中学生を防災訓練に参加してもらったり、消防団の訓練を実施したり、毎年炊き出しイベントをしたりしている。

訓練だけでなく防災に関する講演も行っている。防災備品をどこがどれだけ持っているのか分からない。自主防災会の役割がはっきり見えない。震災が起こったときに市にどうやって連絡するのか。そのような疑問が出て来て、円卓会議を開こうとなった。これまで4回事前の議論をしている。今のところ、自分の思った通りではないかもしれないが、来年度の会長の元、何らかの円卓型会議をしていくことになりそうである。

■追分僚子氏

東海市民活動センターの委託管理などを行っている NPO 法人。

協議の場はすでに終了している。3月3日に行われる東海市の男女共同参画フォーラムのためのパネルディスカッションのための円卓会議だった。とても議論が盛り上がり、今もフェイスブックなどでつながっている。

「ワークライフバランス海外の視点から私が見た日本」というテーマで、日本在住の海外出身の方4名の方に参加してもらい、5回開催した。

最終的に盛り上がったが、初回、日本人の参加者はおじぞうさん状態だった。何を話したらいいのか分からないというぎこちない雰囲気だった。最終的には、コーディネーターの岡本さんの進行がよかった。やわらい進行でリラックスして参加できた。最初は日本人と外国人が席を分かれて座っていたが、言葉のハンディを越えるため、席を入れ子にしたり、記録にルビを振ったりしていった。第2回に場がなごんだ。19歳のエリック君がポジティブな発言をしたことがきっかけだった。また、東海市の職員の参加の姿勢がとてもよかった。同じように協議に参加してくれたのがよかったと感じている。温かいお茶を出したり、リラックスした雰囲気はとても大事だと思った。

■石川れい子

蒲郡から来た。まだ地域円卓会議をはじめていない。これからやっていきたいと準備をしているところ。新しく民生委員になった方が、担当する地域に思ったより高齢者が多かったことに驚いてどうしようと相談に来たことが一つのきっかけとなった。

高齢化が予定より早く進んでいることも勘案し、居場所づくりをしたいという、テーマしかまだ決まっていない。サロンは月に1回しか実施されておらず、現状をヒアリングしたところ、もう少し資金や人がいたら、もっとやりたいという声が挙がった。そのためまずは現状を共有して、参加者の方々の実践を生み出して行きたい。やれることからやりたい。やりたいという人のサポートをしていきたいと考えている。

【質疑応答】(敬称略)

<ファシリテーターについて>

(榊原/武豊町)

ファシリテーターについて聞きたい。自分たちでファシリテーターをしていくのは、経験がなくて困ってしまう。ファシリテーター自体を養成する講座はあるのか。プロの方をお願いするのか。岡本さんをお願いすればいいのか。

(廣口)

阿久比町のモデル協議では㈱パブリック・ハーツの水谷さんというプロのファシリテーターに依頼した。行政職員としては、市民と平場で話し合うのは苦手。第三者の方に来てもらったのはとてもよかった。水谷さんやサポートしたさんとルールを決めて共有したからこそ、良い関係が作れたと思う。

(久野)

南粕谷コミュニティのファシリテーターを担当した。

本当に地域の中にコーディネーターとして、利害に関わらず立てる人がいればその人がやっていく方がいいと思う。ファシリテーターが外部人材だった場合、その後の運営にどこまで関わって行けるか、一つの限界がある。それをどう乗り越えるのかもテーマの一つ。自前でやっていくのも一つの道だろう。

私たちファシリテーターも現場の中で学び、経験を重ね、名乗れるようになってきた。地域の方がやっていくことの方がいい。それまでのつなぎとして専門家人材を活用してはどうか。

(岡本)

地域のファシリテーター養成は、公設市民活動センターで、例えば豊田市ではつなぎすと、刈谷市ではつなぎ人など、それぞれ行っている。一宮市活動支援センターの星野さん、どうですか。

(星野)

地域の中にたくさんいる状況にしていきたい。連携をしながら、育成をしていきたいと考えている。具体的などころまではまだ至っていない。

(岡本)

そのまちを心底大切だと思おう方で、ファシリテーターの力を持っている方を選んではどうか。

<円卓会議の参加者について>

(山崎／蒲郡)

円卓会議に参加する方について。入って来てくれる方をどう判断するか。どこまでの方を呼べばいいか。

(伊藤)

私の場合は、参加者の選定は社協職員の方に丸投げしてしまった。場づくりであれば、多様な方、年齢層、障がいがある方、ない方に関わらず声かけをしては。来ていただけない方でも、どうしても来てほしかったら熱心に声かけをする。

(加勢田)

市の職員関係、コミュニティ、町内会関係者8人～9人くらいをイメージしている。

(追分)

テーマに興味のある人。日本人にとって当たり前というものが、海外から見たらおかしいということに気がついてほしかった。最終的にはバランスを考えた。日本人は外国通ではなく、一般的な人に参加してもらった。

(石川)

大きな枠で声がけをしようかと考えている。

(岡本)

ガイドブックの6ページを見てほしい。地域の方やNPOの方から、中間支援機関や社協、行政に相談に行き、連携してコーディネーターとなり、相談し合って参加者の選定もするという形が阿久比町のケースだった。

(廣口)

阿久比の場合は、事前に行政と、社協とサポちた、もやい安井さんと4者で参加者について徹底的に考えた。そこから、一緒に参加依頼に、4者揃って足を運んでお願いをしに行った。行政の名前をここでこそ使うべきだと思う。

<円卓会議参加者における社協の存在感は？>

(前山/半田)

それぞれの円卓会議の実践の中で、社協職員が入っていないのはなぜなのか気になる。

(石井)

民生委員が入っていた。社協とのパイプ役という意味でも入ってもらっていた。人数の制限があったことも一因。

(板持)

引っぱり出すという意味でもメンバーになってもらっている。

(加勢田)

社協に声をかけようか悩んだ。テーマが広がりすぎるかと思い、次の課題に

しようとした。

(追分)

NPOとして社協とも連携はしている。テーマも男女共同参画だったため、あえて外す等はしていない。

(石川)

現状に対してヒアリングは行った。円卓会議に入れてしまうと「社協さん、お金ください」となってしまうといけないので、今回は控えようと思っている。

5. グループ別意見交換会

テーマ「地域円卓会議の活用法」

*記録がまとまり次第、アップいたします。

6. 総括（岡本）

今、みなさんに体験していただいたのが地域円卓会議を開催する前の「プレ円卓会議」。まずは集まれる人でテーブルを囲む。地域円卓会議は、課題設定がとても重要だが、適切な課題設定のためにも、プレの場に出てきた問題、具体的な地域の課題に向き合い、一緒に考えて行く機会づくりをそれぞれの地域でやりやすいところから始めてみることも、一つの方法だと考える。

円卓会議を進めるにあたり、冊子を参考にしてもらったり、サポートちたや愛知県に相談したり、各地域の市民活動センターや社協など、課題にあった相談場所に相談しながら、各地域で円卓型で地域課題解決を進めてほしい。

以上